

長州藩の公武合体運動

大 嶽 靖 之

はじめに

文久元（一八六二）年五月から翌年四月までの一年間にわたって展開された「航海遠略策」による長州藩の公武合体運動は、幕末政治史に一大転機をもたらした重要な歴史事象であるにもかかわらず、これに関する本格的な研究は、これまでほとんど行なわれていない。⁽¹⁾その主たる原因は、明治以来の藩閥史観が長州藩における尊攘運動から討幕運動への転回を明治維新への主流としてとらえ、戦後の研究も、この先入観から脱却することができなかったため、尊攘運動が高揚する以前に藩を挙げて展開された公武合体運動は軽視され続けたことにあると思われる。

そこで、本稿は長州藩の公武合体運動を幕末政治史上に正當に位置づけるためのアプローチを目的として、運動の形成と展開の過程、および尊攘派の反対運動について考察しながら、同藩が直面しなければならなかった当時の政治状況についても若干の検討を加えてみたい。

第一節 運動の形成過程

(1) 安政の藩是三大綱と改革綱領

安政五（一八五八）年五月、萩の国相府（当職益田弾正）が、江戸から帰国途中の藩主毛利慶親に提出した意見書には、結論として「天朝え之御忠節、幕府え之御信義、且は洞春公（藩祖毛利元就）——引用者注、以下同じ）以来之御忠志を被為繼、御孝道にも相協可申」⁽²⁾という、朝廷、幕府、毛利家を三位一体的にとらえた公武合体論が示されていた。そして、藩主が帰国すると、この意見書が採用され、「安政の藩是三大綱」となったのである。

これを機に、藩政の実権は周布政之助を領袖とする改革派の手に握られた。改革派は、藩政改革の実行にあたっての綱領を作成するために、国・行両相府の吏僚に対して改革意見書の提出を求めた。これに依えて意見書を提出した吏僚は十六人であり、その採択数は合計六十三ヶ条に及んだが、大別すると次の四項目となる。

(1) 御軍政之事（十四ヶ条）

(2) 文武御引立之事 (十ヶ条)

(3) 御政道条令并御家来中御親愛之事 (二十七ヶ条)

(4) 民政之事 (十二ヶ条)⁽³⁾

その方法は多岐にわたっているが、改革の目的を一言で表わせれば「富国強兵」である。すなわち、(1)では軍政改革による兵力の充実が、(2)では文武の奨励による人材の育成と、その登用が図られている。さらに、(3)では倭約による財政再建や言路洞開による藩士の凝集力の強化などが、(4)では民政の充実による民心の安定や年貢の増収などが図られているのである。これらは皆、長州藩の国力を充実させるための手段に他ならなかった。そして、この安政改革における富国強兵策の延長線として、文久元年になって対藩外的に打ち出されたのが「航海遠略策」である。

(2) 長井雅楽と「航海遠略策」

長井雅楽は文政二(一八一九)年に禄高百五十石の大組馬廻士の家に生まれた。天保八(一八三七)年に藩主慶親の小姓役に拔擢され、嘉永四(一八五二)年には奥番頭、および世子の保傳役に任じられるなど、長井は常に藩主もしくは世子の側近として仕え、安政五(一八五八)年には直目付に就任した。⁽⁴⁾

文久元年三月、長井は藩主に建白書を提出した。これが「航海遠略策」のオリジナルであるが、その内容を起承転結に分けて要約すれば、およそ次のとおりである。

(起) 曲直利害論による鎖国攘夷の否定

(承) 開国への正統性の賦与

(転) 開国による攘夷

(結) 航海遠略による公武一和

長井は、まず「夫能戦者は先づ其曲直利害を明らかに察し、我に直我に利ありて而る後戦を決し候事、古今必勝之策と申候」⁽⁶⁾と論じ、破約(「鎖国」をした場合の「曲」と攘夷戦争をした場合の「害」が日本側にあることを説いて鎖国攘夷を否定している。

次に承部では「鎖国と申儀、三百年以来、切支丹御厳禁より起り候事にて、往古より皇国之詔と申訳にては無之」⁽⁷⁾と鎖国の正統性を否定し、「伊勢神宮之御誓宣に、皇統は日之神之御末にて、日之神之照し給へる国々は即ち吾君の知し召国なりとの御事にて、皇国計り吾君之知し召可き事にあらす」⁽⁸⁾と、開国進取こそが古来からの国策であったことを明らかにして、開国に正統性を賦与している。

さらに転部では「攻取は即ち神祖之思召に候得は、即今神慮を継せ給ひ、他日皇威海外に振ひ、五大州貢を皇国に捧げ不來不置との御規模、一旦思召立せ給ひ候は、忽黠夷之虚勢を挫き、皇威海外に振ひ候半事、年を期して可待候」⁽⁹⁾と論じて、空間的拡大による攘夷の読み替え、換言すれば専守防衛的攘夷から拡張主義的攘夷への転換を行なっている。これは、言うなれば「開国攘夷論」の提唱である。

最後に結部では「御国之為め何卒是迄之御凝論被遊御氷解、伊勢神宮之御誓宣に御随ひ、鎖国之叡慮被思召替、今日より海軍御張立て、我より彼之国へ押渡り、互市交易を名とし、渠か巢穴を探り、渠か虚喝を押へ、黠夷之恐るゝに足らざる事を士民に知らしめ候様嚴重関東へ御下知被為在候は、関東にても決て異論は有之間敷、即時に承伏可有之、御下知を関東に奉行仕候は、則公武御一和に

て、即時に海内一和可仕候⁽¹¹⁾と論じて、航海遠略という対外政策の一致による「公武御一和」(「対内的安定の実現を以て、その結論としている」。

この建白書が提出されると、藩主はこれを藩政府(当役益田弾正、当職福原越後)に討議させた。藩政府は長井の建白書に基いた議案を作成し、三月二十八日に藩主の裁可を得て「航海遠略策」は藩論となったのである。

藩論としての「航海遠略策」は周布政之助が起草したものである。周布の「航海遠略策」では曲直利害論が姿を消しているが、全体の要旨は長井のものと何ら変わりはない。だが、ここで特に注目すべきは、その冒頭部分で「近來外患日々切逼、禍乱旦夕に相逼候付、皇国連綿之御門地に被為立、御両国御持堅め之御手段に而已被成御着眼、御全国之一大事をは御傍觀に被打過候而は、朝廷え之御忠節、幕府え之御信義、御先祖様方え之御孝道難相立⁽¹²⁾」と、「航海遠略策」が「安政の藩は三大綱」の延長線にあることが明確にうたわれていることであり、これは長井の建白書には見られなかったものである。

また、その末尾部分には、但書として改革綱領のダイジェスト版とも言ふべき次のような一節が加えられている。

但、伺之通被仰付候は、第一御国政今一段被成御張立、諸士中未々迄忠孝之教能々行届候様御手段を被尽、郷校御取建、諸士をは成丈け土着に被仰付、農兵を訓練仕、内、守候者は土にして、農を兼、地力を養、人力を極、米紙蠟其外之産物追々出来増候様、精々御世話相成候は、富強之基相立可申、猶又蒸氣船御買入被

成、内地之交易は申迄も無之、外国え航海之儀御願取をも被成候而、庚申丸丙辰丸蒸氣船等え乗組之者え外事御委任、土にして、商を兼、候心得を以、御奉公仕候様被仰付候は、巨艦え乗組、不測之風濤を犯し、死地に罷居候心地に而、其功業別て速に相立可申候⁽¹³⁾。(傍点引用者)

このように、周布は安政五年の改革綱領をベースとしながら、「内を守候者は土にして農を兼」ね、(蒸氣船で海外に乗り出す者は)「土にして商を兼」ねるといふ、土農工商の身分秩序にとらわれない柔軟な発想を以て航海遠略の新時代に即応しようとしているのである。

以上のように、周布には「航海遠略策」は安政改革における「藩は三大綱」と「改革綱領」との同一線上にあるという明確な認識があった。改革派の領袖たる周布にとって、それは当然のことである。だが、長井の建白書からは、そのような意図は読みとれない⁽¹⁴⁾。このような、両者の間の「航海遠略策」に対する認識の微妙な相違が、やがて両者が袂を分かつ一因となるのである。換言すれば、周布が富国強兵論に基いた藩の実利を最重要視したのに対し、長井は「航海遠略策」の唱道者として、その思想面を最優先せざるをえない立場にあったのである。

三月晦日、長井に対して公武間周旋の命令が下された。その直前に長井は周旋役を辞退すべく投票による人選を提案したが、却下されている。長井が周旋役を辞退しようとしたのは、直目付の任ではないという理由だけではなく、「航海遠略策」の提唱者である彼自身が周旋まで行なつては、彼の存在ばかりが突出して、結果的に彼

の独走になってしまったり、あるいは少なくともそう思われてしまふ危惧があったからと思われる。そして、実際に事態はそのように推移してゆくのである。

第二節 運動の展開過程

(1) 朝廷への第一回入説

五月十二日に京都に到着した長井は、十五日に議奏正親町三条実愛と会見して、建白の趣旨を陳述した。長井の役目は口上のみで説明することであったが、その弁舌に感じ入った実愛は、天皇に上奏する際に「口上ニテ承り候事ハ御口移シ御六ツカ敷、真之密々他へ洩候氣遣ハ無之候間、何卒書取ニ致具候様」と、長井に書面の提出を求めた。これに対して長井は「一応ハ御断申上候得共、是非御所望之由被仰聞候間、其余御断申上候モ如何敷御座候間、御請仕退出⁽¹⁷⁾」し、二十三日に建白書を提出した。この建白書は、長井が藩主に建白したものをベースとし、その用語や言い回しに若干の違いがあるものの、論旨には何ら変更はない。だが、これがやがて外部に洩れて尊攘派の手に渡ると、藩主には累を及ぼさず長井を攻撃するための材料とされるのである。

この建白に対する朝廷の反応を示す史料は非常に乏しい。わずかに『孝明天皇紀』に次のような記述が断片的にあるのみである。

雅楽カ此ノ書ヲ呈出スルヤ朝議大ニ可トシテ尚ホ幕府ニ対スルノ方略ヲモ商議セラレタリト見ユ(中略)而シテ雅楽ハ六月二日正親町三条殿ヨリノ召ニ因リテ参調セシニ叡慮嘉納アラセラルノ旨ヲ伝承シ且ツ其周旋ヲモ依託セラレ時ニ辱ナクモ御製ノ御歌ヲ賜ハ

ラレタリ(中略)雅楽ヲ以テ公(藩主)へ賜ハリタル御歌ハ
国の風吹起しても天津日を

もとのひかりにかへすをそまつ

権大納言藤原実愛奉⁽¹⁸⁾

この御製が端的に示すように、天皇は「伊勢神宮の御誓宣」(「天日ノ照臨スル所ハ皇化ヲ布キ及シ賜フ可シ」)⁽¹⁹⁾の提示による開国正統論と、神功皇后の「三韓征伐」(「人ノ子孫タル者、上下トナク其祖先ノ志ヲ継ギ、事ヲ述ルヲ以テ孝ト仕り候儀ニテ、往昔神后三韓ヲ征シ賜ヒ候モ全ク神祖ノ思召ヲ継セ賜ヘル御事ニテ、莫大ノ御大孝ト今以テ称シ奉リ候」)⁽²⁰⁾を例に挙げた開国攘夷論に魅せられ、皇威を「もとのひかりにかへす」ことを望んで、この建白を受け入れたのである。すなわち、長井の報告書によると、天皇は「深ク叡慮被遊、御胸懷之雲霧初テ晴レ(中略)成程鎖国ト申候テハ神祖ノ思召ニモ不相叶、洋夷日益猖獗尤之事ニ候。此上ハ一日モ早く海外へ押懸、皇国之武威ヲ示シ候様可致」⁽²¹⁾と、「航海遠略策」に対して全面的に同意したのである。

ただし、この報告書によると天皇は「乍併是迄鎖国之論ヲ以関東へ申下ケ候儀、従京都説ヲ屈候様ニテハ以後之示方ニモ係り候様可有之」と、開国に同意しながらも、それを朝廷の側から切り出すことには難色を示している。これに依えて長井が「其段ハ長州家ニ於テ深ク心配仕居候事ニテ、已ニ使之者京都ノ御様子相伺次第関東へ罷下り、幕府へ申解成否ハ天ニ任せ御威光相立候様取計之儀、主人ヨリ重疊被申付候事ニ候得ハ、其段ハ決シテ無疎含居候」⁽²²⁾と、幕府への周旋の意志を明らかにしたところ、朝廷は「左候ハ、使之者ヨ

り早速関東罷下り、何卒一日モ早ク其次第二相成候様心配可致段、申付可然⁽²⁴⁾と、長州藩に周旋を命じたのである。そこで、長井は幕府への入説を行なうため、六月三日に江戸へ向け出発した。

(2) 幕府への入説

六月十四日、長井は江戸に到着した。そして、十六日には藩主の名を以て今秋の参勤途中での入京の許可を求める伺いが幕府に提出され、認められた。⁽²⁵⁾

七月二日、世子定広は老中久世広周と会見し、長井への面会を求めた。久世はこれを了承して長井を呼び出し、建白の趣旨を陳述させた。そして、まず長井が内政の一新と軍備の充実に由る積極的開国論を説いたところ、久世はこれに同調して次のように述べた。

先年来、堀田備中守、間鍋下総守上京被仰付候所、右利害得失論⁽²⁶⁾判迄不相待、矢庭ニ鎖国之議を以被逐帰、於只今ハ幕府にも十方ニ暮れ、叡慮之通り鎖国致候得ハ目前之禍を請け、又航海を以御国威を張り候手段を致候得ハ叡慮ニ不相叶との事ニて人氣も揺動可致歟、誠ニ御当惑之御時節ニ候。右ニ付、自分心得を以相尋度事有之候。其次第八御主人御家ハ古来より格別京都へ御手続きも有之候由ニ候得ハ、此御国難之御時節將軍家より御依頼も被為在候ハ、御国是之所京都へ被仰解、御周旋被成思召共ハ無之候哉。⁽²⁷⁾

このように、久世は幕府の対朝廷交渉が失敗に終っていることを示して、長州藩に周旋の意があるか否かを問うてきたのである。老中筆頭たる久世が幕初以来の慣習を破って外様の長州藩の周旋に期待をかけた理由は、久世の言の如く毛利家と朝廷との古来からの密接な関係のためばかりではなく、藩主毛利慶親の「非有志性」⁽²⁸⁾によ

る安心感が背景にあったものと思われる。⁽²⁸⁾

かくして、長州藩は朝廷と幕府の両方からその周旋に期待をかけられるという立場になったわけだが、長井は久世の周旋依頼を固く辞退した。その理由は、長井が「主人周旋仕候と申事に相成候得は、先第一京都之御威光相立、第二関東之御都合宜敷様に」と答えたように、まず朝廷への周旋を優先させて、それから幕府に対する方針を決定するためであった。久世もこれを了承して、会談は成功裡に終わった。

その後、一ヶ月にわたって長州藩と幕閣との交渉は行なわれなかった。これは、イギリス公使オールコックとの両港両都開港開市延期交渉で幕閣が多忙を極めていたためであるが、また久世が長州藩の周旋にあまり乗り気でない老中安藤信正を説得して、幕閣内の意見調整をしていた期間でもあったと思われる。

八月二日、久世は再び長井を呼び出して、安藤にも建白の趣旨を陳述するように求めた。そこで翌三日、長井は安藤と会見したが、長井の報告によると安藤は次のように答えた。

御尤千万、いつれ万端誠意ならては相調ひ不申、一旦御不和と相成、無間違却出来候様有之候ては如御案思最早手之降し所無之、即令天下之大変に至り可申、重疊御尤に相考候。夫と引変御主人御周旋を以公武御一和、皇国之御武威海外ニ振ひ候程ニ相成候ハ、御主人におゐてハ天下之大御勲業無比類事と相考候。⁽²⁹⁾

このように、安藤も久世同様、長州藩の建白に好意的で、むしろ久世以上に長州藩の周旋に期待をかけていることが窺われる。これが久世の説得による翻意であるのか、あるいは久世との妥協の結果

として、表面上を好意的に装っただけであるのかは不明である。だが、ともかく長州藩の建白は、後に久世・安藤政權と称される幕閣の両輪に受け入れられ、かつ藩主による朝廷への周旋をも期待されるに至ったのである。⁽³¹⁾ こうして、幕府への入説にも成功を収めた長井は、それを参勤の期が迫っている藩主に報告するために、一旦帰藩の途に就いた。

八月二十九日に萩に戻った長井が、藩主および主だった家臣に、これまでの経過を報告したところ、藩主は予想以上の好首尾に意を強くして、今度は自ら周旋にあたる決意を固めた。そこで、藩主は今後の方針を練るために病と称して参勤の期をさらに遅らせたのである。⁽³²⁾ ところが、九月十五日に萩を出発した藩主は、まもなく本当の病気になる、しばらく療養せねばならなくなり、十月九日には安芸の海田宿で藩主の入京中止が決定された。⁽³³⁾

だが、朝廷への周旋が行なえないほど藩主の体調が悪くはなかったことは、伏見に着いた十月二十四日に益田弾正が藩地に宛てた次の書簡に明らかである。

一筆令啓達候。殿様益御機嫌能、今日伏見被遊御着、恐悦至極奉存候。然者先達而之御機嫌相御睨々不被為在候付、京都不被遊御立寄段、別紙を以申進候処、右者京都不被成御立寄為之御唱ニ而御内実於御機嫌者弥被遊御全快奉恐悦候。右様被成御承知上々様方御安心被成候様申上之可被成御沙汰候為其得御意候。恐惶謹言。

十月廿四日

益 弾正(宛名省略)⁽³⁴⁾

このように、藩主は病気が全快していたにもかかわらず、朝廷への周旋を行なわなかったのである。これが、長州藩の公武間周旋が

失敗に終る原因の一つとなる。

さて、十一月十三日に遅れて江戸に到着した藩主は、十八日に久世・安藤を訪問したところ、両者ともに長州藩の建白に歓迎の意を示した。そして、二十一日に久世は長井を呼んで、建白の趣旨を書面にして提出するように要請した。これを受けるかどうかは藩主御前会議に諮られたが、結局受けることに決定した。そこで、政務役(藤井庄兵衛、山田宇右衛門、中村九郎)が議案を作成し、「末藩各侯ヲハシメ、在邸重要ノ役員ヘモ意見ヲ求メシカ異論ナキヲ以テ」⁽³⁵⁾ 十二月八日に長井から久世に建白書(長州侯建白)が提出された。かくして、ようやく藩主が先頭に立つての周旋運動が開始されるに至ったわけであるが、これはまた、周旋のための藩主の表立った行動としては、ほとんど唯一のものとなるのである。

その一方で、長井は十二月三日に大目付駒井朝温、目付浅野氏祐と会見して、「航海遠略策」の幕閣への浸透を図った。これらの働きかけが功を奏して、十六日に幕府は世子定広を少将に任じ、また晦日には久世が長井を呼んで、次のような幕府の意向を伝えたのである。⁽³⁷⁾

長州建言ノ旨趣ハ当時勢ニ適當シ、之ヲ措テ他ニ良策ナカルヘシトノ幕府内ノ協議ヲ以テ終ニ其事ヲ將軍家ノ聴ニ達セシカバ、大ニ其誠意ヲ感称セラレ、且ツ以往ハ是事ノ周旋ヲ長州ニ委託スヘシトノ將軍家ノ内旨アリ。⁽³⁸⁾

このように、先に朝廷から綸旨に代る天皇の御製を受けた長州藩は、また幕府からも周旋を委託する將軍の内旨を受けたのである。こうなれば、もはや周旋の成功は半ば約束されたも同然であるが、

なおも長州藩は次の如く慎重な姿勢を崩していない。

愚陋ノ建言不図モ称賛ヲ蒙リ奉リ感銘ニ不堪、然レトモ実ニ国家重大ノ事件ニテ数回ノ熟考ヲ要スレハ、奉命ハ暫ク猶予ヲ願フ。
(中略)僭越ノ愚論嚴譴ヲコソ恐懼シタリシテ却テ意外ノ委托ヲ蒙リ前途ノ方向ニモ迷惑シ実ニ措ク所ヲ知ラス。因テ先ツ支封三家吉川監物并ニ諸老臣ヘモ協議シ、又更ニ京師近日ノ事情ヲ熟察スヘケレハ多少ノ日子ヲ要スヘシ。此情実ヲ貴意ニ留メ置カレタシ。⁽³⁹⁾
「航海遠略策」の入説には積極的であつた長州藩が、幕府の周旋依頼には消極的となつた理由としては、まず藩内に慎重論や反対論が根強かつたことが挙げられよう。⁽⁴⁰⁾長州藩のこのような態度は、周旋が挫折するに至る一因となるのである。

明けて文久二(一八六二)年正月三日、長州藩は幕府の周旋依頼に応えるための手始めとして、長井に対して「御内用之趣有之、近々之内御国被差下、京都えも立寄被仰付候事」という、上京および帰国命令を下した。だが、長井は次のように辞退の意を示した。

此度之御建議ハ申迄も無之、皇国最大之御事柄に候得ハ、雅楽式輕輩之者を以て御手先ニ可被召遣筋ニ無之様奉存候。吉川殿出府被仰付御手先に被召遣候とも可然儀かと奉存候。是以矢庭に相調兼候事ニ候得は、御家老中之御家老表より被召呼、御手先ニ被召遣度御事、是以只今之間ニ相兼可申候得ハ、差当リ彈正殿御詰居之事に御座候得ハ、其内御用筋外向御取計被為在候て如何哉。⁽⁴²⁾
長井には、自分の役目は非公式の先触れ役に過ぎないという認識があり、幕府の依頼を受けた「皇国最大之御事柄」たるべき朝廷への周旋役は、もはや「雅楽式輕輩之者」の任ではないと主張した。

そして、この大任を務めるのにふさわしい人物として、まず支族岩国藩主の吉川経幹を挙げるが、在国中の吉川や他の家老を呼び寄せるのでは時間がかかるので、江戸藩邸内に目を転じて、当役(行相府家老)の益田弾正を推薦したのである。益田は永代家老で禄高は一万二千石であるから、周旋の任に当るのに十分な資格を持った人物と言える。

ところが、これを久世に問い合わせると、久世は次のように答えた。

御手厚之御事ニハ御座候得共、唯今に於てハ未だ御内談之義、表立候儀ハ御直談にも可致、只今別人被差越てハ是迄之手続も相改⁽⁴³⁾り、且当分互ニ氣置ニも有之候得ハ、矢張雅楽被差越被下候様ニ久世にしてみれば、周旋は「未だ御内談」の段階であり、また人が代ることによって従来の路線に変更が生じたり、意志の疎通に支障をきたすことを恐れて、引き続き長井が周旋の任に当ることを希望したのである。

結局、長州藩は久世の申し入れを了承し、従来「御用人」として周旋に當ってきた長井に対して「於外向ハ中老所御雇⁽⁴⁴⁾」という肩書きを与えた。だが、いかに外向をそのように装つても、禄高わずか三百石の長井には、周旋の任は荷が勝ち過ぎていたと言える。この非力さは長井の才能や弁舌を以てしても補うべくもなく、事実この欠陥は島津久光の率兵上京に遭遇することによって一気に露呈してしまふのである。

正月十五日、坂下門外の変が発生し、老中安藤信正が負傷した。これによって幕閣内は混乱をきたしたので、長井の上京はしばらく

延期されることになった。次いで二月十一日には將軍家茂と皇妹和宮との婚儀が行なわれたので幕閣は多忙を極め、長州藩との交渉はしばらく中断したままとなった。この交渉の遅れが長井の上京の遅れとなり、周旋が挫折する一因になるのである。

幕府と長州藩との交渉が再開されたのは二月二十四日のことである。この日、長井は江戸城中に召され、破格の待遇を以て蘇鉄之間に伺候して、柳之間に列座した老中久世広周、内藤信親、本多忠民、松平信義の引見を受けたのである。

長井の手記によれば、この時の長井と四人の閣老との会談の内容は次のとおりである。

一 越前春岳御断との事

右被仰聞

一 御同席御外席にて有志の諸侯へハ御相談之事

一 水府有志之者説得之為、水戸へ桂小五郎遣はし候事

一 水府へ綸事之事

右御尋申上候事⁽⁴⁶⁾

第一項は、朝廷からの松平慶永の大老就任要請に対して、幕府が拒絶の意を示したものである。また、第二項は長州藩が幕府に外様の有志大名を幕政に関与させることを求めたものであり、第三、第四項は水戸藩の騷擾收拾のための長州藩の提言であるが、会談の詳細については定かでない。

三月四日、長井は藩主の命により久世と会見して、將軍後見職の田安慶頼の上京を進言したところ、久世はこれを閣議に付すことを約束した。結局、この田安上洛論は実現をみなかったが、これはや

がて將軍上洛論へと発展してゆくことになる。

翌三月五日、長州藩は改めて長井に上京、帰国を命じ、次のような使命を授けた。

一 島津和泉守⁽⁷⁷⁾(久光)の近日江戸へ来るを聞く。若し途上に遇は、其旅館へ謁し、吾か建言の趣を陳説し、又彼の意見を請ふへし。

江戸に於ても吾留守居を彼邸へ遣はし、予め此事を照会したり。

一 今般の事は実に国事重大の要務と謂ふへし。然れば已に幕府の内情を伺候したる旨もあれ共、京師に於ては要路へ懇々陳説して、苟も和融の道を開き、皇威張興の基本を確立せんと日夜辛勞の力を竭すへし。因ては実地機会の往復遅延し難き事情もあらむ。従来公立志の旨を伺ひ定めし処を失はず、機に臨み変に應じ処置すへし。如此して眼前の事情粗測定せし処もあらは速に公の所へ報道すへし。而して後、雅楽は直に藩地に下り、駐在の家老へ告示し、藩府に於て充分討議を尽し江戸へ復命すへし。而る後尚ほ事情を熟察し、幕府の命を領受する舉にも及ぶへし。

一 松平修理大夫(島津茂久)へは此事を熟謀し、彼侯の意見を請はんと従来公の志なれば、雅楽は速に彼藩に赴き直接に談論して、彼侯の意を取り、公へ具申すへし。若し雅楽か国に留り事を謀らざれば事務障碍の顧念もあるか或は途上泉州(久光)へ応接し、事情已に明亮し彼藩へ往くを要せざる事宜にも到らは、他人へ其主旨を付托して代り往しむへし。

一 細川越中守(慶順)は親姻の縁もあれば同しく協議せんと欲す。

故に雅樂か薩行の路を迂し、熊本に往き、薩と同じく処置すへし。若事故ありて行く能はされは、他人へ代り理せしむる亦薩に同じかるへし。此二事は藩地家老中と謀り、意見を受け時宜に応ずへし。⁽⁴⁸⁾

以上のように、長井の使命は朝廷への周旋と藩地への報告にとどまらず、江戸への道中にあるはずの島津久光との会見や、場合によっては鹿児島や熊本にまで赴いて、両藩との交渉にあたることまで求められている。⁽⁴⁹⁾すなわち、従来は朝幕間の周旋だけであった長井の任務が、薩摩、肥後両藩との交渉にまで拡張されたのである。このような過重な使命を担って、長井は三月十日に江戸を出発した。

(3) 朝廷への第二回入説

三月十八日に京都に到着した長井は、翌十九日に正親町三条実愛と会見して、幕府との交渉の経過を詳しく報告した。そして、実愛がそれを天皇に上奏すると、天皇は「此七八年無之愉快之儀を聞たり⁽⁵⁰⁾」と、長州藩の幕府への周旋に対して非常に満足の意を示した。すなわち、天皇は長州藩の周旋をペリー来航以後、最高の愉快事と評価したのである。

次いで三月二十六日、長井は議奏中山忠能邸を訪れ、中山と岩倉具視に建白の趣旨を陳述した。この時の模様を岩倉は同日付の正親町三条実愛宛書簡の中で次のように述べている。

今日於中山家、彼永井面談種々承り候。高論不堪感服、朝威之光輝唯々此時と存候。併軽卒には難被行、意味深長之事と存候半も、不申入おちく致候而已、万々拜上ニ可申上候。⁽⁵¹⁾

このように、岩倉もまた長井の「航海遠略策」に魅せられたが、

その実行については慎重な姿勢をとっている。だが、岩倉は長井の弁舌に圧倒されて、なかなかそれを言い出せないでいる様子が窺われる。岩倉は当時、和宮降嫁を成功させて得意の絶頂にあった。特に和宮に随行して江戸へ下った際には、久世、安藤の両閣老と会見して、幕府の廢帝論の噂を難詰し、ついに前例のない將軍直筆の誓書を提出させるのに成功するなど、岩倉の弁舌の鋭さには定評があったが、その岩倉をしてもなお、長井の「航海遠略策」に対してつけ入る余地はなかったのである。

四月一日、長井は岩倉邸を訪れ、再び岩倉具視と会見した。この時の模様を長井は江戸へ宛てた報告書の中で次のように述べている。四月朔日、岩倉卿に参謁し反覆事務を論ず。其要は、開鎖和戦は末事にて、大本とするは歡慮確定、物議に動揺あらせられず、天下の人心の向ふ所を定めらるゝに在り。摺紳家には力を尽し、歡旨を確定の輔翼を為し玉ふへし。⁽⁵²⁾

このように、長井は歡慮の確定を第一として、開鎖和戦は末事であると論じた。すなわち、長井は対外方針よりも、まず歡慮の確定による対内的一致を優先させたわけであるが、岩倉は長井と「航海遠略策」について積極的に論議することは避けたようである。これ以後、岩倉は長井と会見することはなく、専ら薩摩藩の公武合体運動の先導者である堀次郎との会見や連絡を頻繁に行ない、島津久光の周旋に期待をかけるようになる。

翌四月二日、長井は大原重徳と会見した。その模様を長井は次のように報告している。

大原卿被召呼候後罷出候。都合議論ハ岩倉家同様、只航海之儀種

々御尋有之、大原、岩倉両卿ハ都合筋合も相立居候。⁽⁵⁵⁾

以上の如く、長井の朝廷への二回目の入説は、天皇をはじめ有力廷臣の間にも浸透しつつあり、再び成功するかに見えたが、島津久光の率兵上京と、それに伴う尊攘運動の高揚が、情勢を一変させてしまったのである。

藩兵約千名を率いての島津久光上京の報は、尊攘派の志士たちに武力討幕の幻想を抱かせ(その幻想は四月二十三日の寺田屋事件で吹き飛んだが)、尊攘運動が高揚する契機となった。それ故に、長井は尊攘派からは幕府の手先と見なされて攻撃され、朝廷からは相対的に軽視されるようになった。ここにおいて、長州藩の公武間周旋の株は大暴落するに至ったのである。

四月六日、正親町三条実愛は長井を呼び出して、島津久光の率兵上京を控えての朝廷の意向を伝えた。この時の会談の模様と薩摩藩の動向については、翌七日に田北太中が藩地に宛てた次の書簡に詳しい。

先得御意候。島津氏過る三日室津着岸、夫より順々陸行の由にて、来る八日大坂、同十一日伏見の由、作爾只今之処にては各別異儀有之間敷、已ニ昨日長井氏正三様罷出、先日より相伺候御国是御一定の御慮相伺候候、此内以来追々御議論之上、昨日歴々の公卿方御参内御評論有之由、縮る処只今干戈御邦内に動候てハ外夷の術中に陥り候儀にて甚不可然、愈以此御方(藩主)御建白通、御一和御合体を第一被為成度、就而ハ此後御約定通り十ヶ年を期限にて愈以武備御興隆、攘夷の御御慮全く御動き無御座候事、御主意の処御草案を以て近々御下渡、御内々被仰出との御事の由に

て、右之段被仰出候ハ、長井氏ハ早々江府罷歸、其段可申上(以下略)⁽⁵⁶⁾

このように、朝廷は島津久光の率兵上京の報に接して、これによって内乱が起こることを恐れ、長州藩の建白の如く、対内的には公武合体を指向したが、対外的には万延元(一八六〇)年に和宮降嫁の条件として幕府に誓約させた十年以内に攘夷の方針を依然として堅持しているのである。これは、引き続き長州藩の周旋に期待する一方で、「航海遠略策」による開国路線については修正を求めるものであった。したがって、この時点で長井の「航海遠略策」による公武間周旋は行き詰まったのである。

また、朝廷は近く長州藩に対して内勅を下すという意向を示したので、長井は当初の予定を変更して、内勅を奉じて藩主のいる江戸に戻るようになった。

四月十三日、実愛は再び長井を呼び出して、藩主の上京を求める次のような内勅を授けた。

奉為皇国関東へ御建白、老中へ示談之上、所存先内々被申述の趣為國家苦心周旋之段、皇國之御大事候。演説之通弥大樹家へ被談合候後、上京も有之、以其筋被申上候は御沙汰之御次第可被為在と存候事。

但右之通に相成候節ハ従大樹家も其子細以其筋被言上候儀と存候。⁽⁵⁷⁾

朝廷が長州藩主に上京を求めたのは、島津久光の率兵上京を前にして、武力を背景とした久光の行動に強い不安を感じていたためと思われる。そこで、朝廷は薩摩藩の独走を防ぐために、前年から公

武間周旋を行っていた長州藩に期待をかけたのである。⁽⁵⁸⁾だが、藩主の上京までには多少の時日を要し、その間に勅使大原重徳を奉じての島津久光の東下が決定され、この時には朝廷は一転して長州藩主に対して、江戸に留まって勅使を補佐することを期待した、結局両藩の周旋運動は、すれ違いに終わった。これを契機として、両藩の關係は競合から対立へと移行するのである。

翌四月十四日、内勅を奉じた長井は、島津久光の入京を目前にして騒然とした京都をあとにして、江戸へ向け出発した。

第三節 尊攘派の反対運動

(1) 航海遠略策反対運動

「航海遠略策」が藩論になろうとしているころ、すでに藩内尊攘派の反対運動も開始されていた。文久元年三月二十五日、江戸にいた久坂玄瑞は、藩地で「航海遠略策」が採用されようとしているのを聞いて、手元役の中村九郎に書簡を送り、次のような反対の意思をいちはやく表明したのである。

抑国是か建不申而は中々航海も遠略も矢張泛論浮策、苟且之一端にて可有之、目睫に迫り候禍変を患候得者、別に一大急務も可有御座と奉存候。(中略)此勢にて海濤万里之外へ乗出候共、夷人に頭を抑られ候而、迎も我勢氣を伸ふる事は叶ふまし。(中略)今之御地位にて泛然として航海遠略之口実とのみ被成候而は不相濟事と存候。⁽⁵⁹⁾

二月三日に起きたロシア軍艦対馬占領事件は、二月晦日に幕府に報告され、三月二日には諸大名に通知されていたので、久坂の耳に

も当然入っていたであろう。長州藩と対馬藩とは地理的にも近く、また毛利氏と対馬藩主の宗氏とは姻戚關係にあったので、この事件は長州藩にも大きな衝撃を与えた。このような「目睫に迫り候禍変」がありながら航海遠略を唱えるのは「泛論浮策」で、「別に一大急務も可有御座」と久坂は主張しているのである。

久坂は六月二十二日付の入江九一宛書簡の中でも、次のような反対論を展開している。

公武合体も幕吏をして天勅を遵奉さずる積なれば当然にも候得共、幕を助け天朝を抑へ候様に相成候而は何共不相濟事也愚念仕候。何れ之処は航海の道開け鯨濤万里之外へ乗出す策にて無之而は不相濟候得共、方今差当り対馬などの事もあり、且彼の凌轢を受なから其罪をも正さず、頭を垂、尾を揺し航海仕候とも武威の張る⁽⁶⁰⁾ 用途は無之と覚申候。

このように、久坂は航海遠略による公武合体に対して全面的に反対しているわけではなく、航海遠略に対しては時期尚早論を唱え、公武合体に対しては、幕府を助け朝廷を抑えることになるとして反対しているのである。つまり、逆に朝廷を助け幕府を抑える公武合体ならば良いわけであるが、航海遠略による公武合体運動では、幕府の外交政策に対する現状肯定として作用し、幕府を助けることになる久坂は見通しているのである。

だが、このような論拠では強い反対理由にはなりえない。久坂は長井に対して数度にわたって討論を挑んだが、朝廷への第一回入説を成功させて自信満々の長井が、一介の書生に過ぎない久坂の議論に屈するはずもなかった。

桂小五郎もまた、早くから「航海遠略策」に反対の立場をとった。だが、久坂のように長井に直接討論を挑むようなことはせず、藩論を起草した周布政之助に対して、次のように反対の意思表示をしたのである。

風評に而承り候得は長雅公武御合休御周旋の爲め出府仕候様子いか様之手段に御座候哉。不審千万と存申候。当時之姦吏等と相謀り、自然勅意を緩め奉り、違勅御手伝之姿ともに相成候而は天下之正氣に相触れ、对御家いか様之御怨申上候哉も難計、真に不容易儀と日夜奉恐案候。(中略)一体鎖国と申訳にても始終之大略難相立候得共、只関東之了簡を以て勅に違ひ人民不折合も不取敢、草莽間力を尊攘に尽せしものは猥に斬戮等せしめ候よりして遂に重三之一挙(桜田門外の変)も有之、藩邸江駈込或は夷人を刺し殺し候様の儀出来、益抑益揚、終此節の如く自滅の姿に相成、五大洲江奮飛仕候事なそは実に思もよらず、御国いか様相調候とも天下之算は相立申間敷候間、是非御参府決然御延引被遊、人才撰萃姦吏掃蕩之御周旋有之度、姦吏を御相手にて之御計らひは天地舊而成就不仕、此段申上る迄も無之事に御座候得とも御果斷奉祈念候。桂もまた、けつして航海遠略や公武合体に対して全面的に反対しているわけではない。ただ、今「航海遠略策」による公武間周旋を行なつては、幕府の違勅調印を肯定することになり、結果的に幕府の「姦吏」を助けるだけであると観測しているのである。そこで、桂は今回の藩主の参勤を延期して、いざれ幕府の「姦吏」を一掃して、すぐれた人材を登用するための周旋をこそ行なうべきであると提案したのであるが、もとより藩政府の採用するところではなかった。

さて、前年七月の「丙辰丸成破の盟約」の締結以来、水戸藩尊攘派との提携運動を推進してきた桂は、長州藩の二大実力者たる長井と周布が江戸にそろつと、二人を水戸藩の美濃部又五郎と会見させるよう画策した。八月三日に実現したこの会見で、長井は尊攘派の美濃部に一線を画して対応したが、周布は、「一昨日長雅一同、常藩(水戸藩)側用人(美濃部)又五郎え面会、常藩之近況委曲承候処、艱難行詰候儀、不図及落涙候程之次第に御座候」と、意気投合した様子を示したのである。この頃から、すでに周布の尊攘派への傾斜が始まっていたと言えるが、周布が尊攘派に転向する契機となつたのは和官降嫁問題であつた。

江戸に来て、和官降嫁に関する情報を数多く耳にするようになった周布は、次第に幕府のやり方に憤懣の念を抱くようになった。⁽⁶³⁾また、開国による経済の混乱を目のあたりにしたことも相まって、周布の幕府に対する不信の念は急激に増大し、したがって「航海遠略策」に対する期待は大幅に減少したのである。なぜならば、「航海遠略策」は幕府の政策を信任することを前提としているからである。ここにおいて、周布は反対派の急先鋒である久坂と急接近し、ついに九月七日に久坂とともに和官降嫁の阻止を参勤の途上にある藩主に建言すべく、江戸を出発したのである。

九月二十二日に伏見に着いた周布と久坂は、そこで藩主一行の到来を待ち受けたが、前述の如く藩主の急病のために参勤の日程は大幅に遅れていた。それを知った彼らは、もはや和官降嫁の阻止は断念したが、なおも自分たちの意志を藩主に告げようとして、中国路を下って行つた。そして、十月五日に彼らは備後尾道の瀬之浦におい

て、藩主より一足先に江戸へ向かっていた長井と遭遇したのである。この時、長井と会見したのは周布だけであるとされているが、両者の間でいかなる討論が行なわれたのかは明らかでない。⁽⁶⁶⁾だが、周布と久坂の行動は、やがて藩主の勘気に触れ、二人とも帰国を命ぜられた。⁽⁶⁷⁾ここに、文久元年における尊攘派の反対運動は失敗に終わったのである。

(2) 長井雅楽弾劾運動

文久二年二月、島津久光が率兵上京の途に就くとの報に接した久坂は、久光の「尊王義挙」に期待をかけるとともに、そのために長州藩が薩摩藩に遅れをとることに激しい苛立ちを覚えるようになった。そして、この焦燥感が久坂の行動をより激烈なものにしたのである。すなわち、従来は「航海遠略策」への反対運動であったが、それでは時期尚早論にしかなりえず、おのずと限界があることを悟って、以後は長井個人に対する弾劾へと戦術を変更したのである。

三月六日、久坂は「長井雅楽罪案」⁽⁶⁸⁾を家老戸備前に呈し、次いで下関の白石正一郎邸に赴き、薩摩藩の西郷吉之助、筑前藩の平野国臣、土佐藩の吉村寅太郎、豊後岡藩の小河弥右衛門ら各藩の尊攘派と会合して、島津久光率兵上京に関する情報収集や、今後の運動方針についての討議などを行なった。むろん、彼らは皆上京して運動を展開しようとしていた。このように、島津久光の率兵上京は、これまで各地で散発していた尊攘運動を一気に中央に凝集させる契機となり、全国から尊攘派の志士が参集した京都とその周辺は、まさに尊攘運動の坩堝と化したのである。

四月十一日に京都に到着した久坂は、十九日に同志佐世八十郎

(後の前原一誠)、檜崎仲介、久保清太郎、中谷正亮、檜崎弥八郎と連名で「長井雅楽弾劾に関する建白書」⁽⁶⁹⁾を藩主に提出した。この建白書で、久坂らは長井の「罪」十二ヶ条を糾弾した上で、次のように結んでいる。

右之罪案一ヶ条有之候逆も中々御寛待難有之儀に候処、右数十条相余り候上は一身を寸断致す共足り候事にては無之候得共、格別之御恵みを以家名断絶は不被仰付、身柄切腹被仰付候条、左様相心得候段御沙汰相成、公然御処置可有之候。此手下し無之ては上様如何程御忠節御立被遊度思召候ても朝廷に於て決して御信任有之間敷、天下有志之者必ず承知不仕候と奉存候。是を第一着の策とす。⁽⁷⁰⁾

このように、久坂らは、朝廷の信任を回復して「天下有志之者」を承知させるために、長井を切腹に処するように強く求めているのである。

それから四日後の四月二十三日に起きた寺田屋事件によって、久坂らが久光にかけていた期待は、もろくも崩れ果てた。これによって、彼らは運動の基盤を自藩に置かざるをえないことを痛感し、そのためにも一日も早く長井を失脚させねばならなくなった。そこで、彼らは朝廷側からのインパクトによって長井を打倒する手段を模索したものである。そして、その結果として打ち出されたのが「謗詞一件」だったのである。

おわりに

「航海遠略策」による長州藩の公武間周旋は、結局失敗に終わった

ものの、その歴史的役割は非常に重要で、以後の幕末政治史の流れを大きく変えたと言っても過言ではない。

すなわち、まず第一に、この周旋は徳川幕府二百数十年の伝統を破って、初めて外様藩が能動的に幕政に関与したものであり、また島津久光の中央政局介入をも誘発させたのである。

第二に、朝廷に対して真つ向から開国論を入説したのは、この周旋が最初であり、あまつさえ、一時は朝廷もこれに賛同の意を示したのである。

そして、第三に、この周旋によって長州藩は初めて中央政局の舞台にのし上がることができたのである。換言すれば、これ以後の政治史は、維新後も含めて長州藩(閥)の動向を抜きにして論じることではできなくなったのである。その意味で、長井が果たした役割は長州藩閥の先駆けであったと言えるが、後進の政治家のほとんどは、長井の業績を積極的に評価しようとはしなかったのである。⁽¹⁾

こうして、長井の活躍によって中央政局における名望を大いに高めた長州藩は、「謗詞一件」の発生を契機として、その名望を保ちながら藩論を攘夷へと転換させるために長井をスケープ・ゴートに供するのであるが、「謗詞一件」、および攘夷藩論への転換過程についての検討は、別稿を期したい。

註

(1) 井上勲「長州藩尊攘運動の思想と構造」(『史学雑誌』75-3、昭42)が、管見の限りでは唯一の研究業績である。

(2) 周布公平監修『周布政之助伝』(昭52、東京大学出版会上巻、二九二頁。(以下「周布伝」と略す)

(3) 『周布伝』上、二九九-三三七頁。なお、安政改革とその綱領については田中彰「幕末の藩政改革」(昭40、塙書房二二〇-二三八頁、および井上勝生「幕末における御前会議と『有司』——日本絶対主義形成の特質について——」(『史料』66-5、昭58)二-九頁を参照。

(4) 直目付の職掌は「行国両相府ノ外ニ立テ政事ノ得失君命ノ徹否及諸職ノ勤怠ヲ視察シ又ハ家老重大命令ヲ発シ或ハ重職任免ノ時ハ必ス列席シ一面ニハ其君命ニ違ハサルヲ復シ一面ニハ国制ニ反セサルヲ檢視ス」(『統日本史籍協会叢書「稿本もりのしげり」二、三二〇頁)ることである。このように、政策の決定や遂行に直接参与することなく、ただそれらが君命や国制に反していないかをチェックするという司法官的役割を担った直目付の長井が、なぜ行政官たる両相府の吏僚が本来なすべき政策決定のための建白書の提出や、後にはその遂行をも行なったのかは不明である。井上勲氏は、この点を直目付の職掌から次のように分析している。

(1) 藩主との恒常的かつ直接的コミュニケーション

(2) 藩主に対する公式的で直接的な情報提供機関としての情報収集の性格

(3) 超党派的性格 (井上勲前掲論文四五-四六頁を要約)

また、井上氏は「有志大名論」を提唱し、長州藩主の有志大名としての条件の欠如が、陪臣たる長井が藩主に代って中央政局に介入した原因であるとしている。(同論文四六-四七頁)

(5) 『忠正公一代編年史』(山口県文書館所蔵、以下『編年史』と略す)は、「航海遠略策」の登場までの経緯を次のように説明している。

(慶親は)速に時勢に応ずる計策を講せられんと家老中及び機密に関する諸役員を督責なり、之に因り卒春以来老臣政員等は数回会議を尽し(中略)公武間周旋の策を建て、公慶親の間に達したり。之に公も熟慮なりて速に此事に着手せしめんとす。『編年史』文久元年三月二十八日条

- (6) 中原邦平編述『長井雅楽詳伝』(昭54、マツノ書店)五四頁。(以下「詳伝」と略す)
- (7)(8) 「詳伝」五五頁。
- (9) 「詳伝」五六頁。
- (10) アルバート・クレイグ氏は「航海遠略策」を“Policy of expansion across the seas”と翻訳しつつ(Albert M. Craig “Chushu in the Meiji Restoration” p.170. Harvard University Press, 1961)
- (11) 「詳伝」五六～五七頁。
- (12) 「周布伝」上、六二〇～六二二頁。
- (13) 「周布伝」上、六二六～六二七頁。
- (14) 安政改革の期間中、長井は世子定広に付いて江戸にいたることが多かった。改革の計画や遂行にはほとんど関与していない。
- (15) この時の実愛の反応を長井は藩政府への報告書の中で次のように述べている。
- (前略) 殊之外御感納、是迄箇様之大議論ハ朝廷ニオイテ絶テ無之、是迄朝廷御失策モ数多有之候得共、慷慨之外丸々献策ハ無之、承知之通堂上ニテ却テ井蛙、旧年越前家ヨリ鎖国ハ下策ト申説起り候得共、下策之誤一切建言無之、夫故今以成敗ハ天ニ任せ、是非鎖国ニ御決意被遊候。然ル処御主人箇程迄ニ御苦心御懇ニ御建白被為在候御事兼テ御頼ニ被思召候御所詮有之、主上ニモ嘸御感可被遊ト相考候。『孝明天皇紀』第三卷、六一七頁
- 実愛が語ったように、朝廷に対して開国論を説いた先例としては越前藩があるが、開国の正統性(ひいては正当性)を詳細に説いたのは長井が最初である。この意味でも、長井の朝廷への入説は画期的なものと言えよう。
- (16)(17) 文久元年五月十八日付、長井より藩政府宛書簡(『孝明天皇紀』第三卷、六一〇頁)。
- (18) 『孝明天皇紀』第三卷、六一七～六二〇頁より抜粋。
- (19)(20) 『孝明天皇紀』第三卷、六一四頁。
- (21)(22)(23) 文久元年六月二日付、長井より藩政府宛書簡(『孝明天皇紀』第三卷、六一九頁)。
- (24) 同右。同じ報告書の中で、長井は次のような実愛の言を伝えている。尚此度之儀ハ誠ニ皇国最大之被仰聞ニ候得ハ、長州家へ綸旨ヲモ被下度トノ御事ニテ、右散慮之趣篤ト相通候様トノ被仰出ニ候得共、唯口上ヲ以申聞候計ニテハ御意味モ難通候様相考候間、即綸旨ヲ三十一文字ニ相調ヒ、私之歌ニ無之印ニ奉之文字ヲ以書渡候間、全ク綸旨ト心得、其段御主人へ可申達トノ御事ニ御座候。
- このように、長州藩の公武間周旋は、朝廷から「皇国最大」の事業であるという最高の評価を受け、幕府に対する入説にも大きな期待がかけられたのである。
- (25) 長州藩の伺いと幕府の回答は次のとおりである。
- 私儀当秋参勤仕候節、京都江立寄、酒井若狭守殿江致参上公方様奉伺御機嫌、次鷹司殿、有栖川宮間柄之儀御座候間、罷越為対面、於蔵屋敷一両日止宿仕、近衛殿、一条殿、西園寺殿者由緒御座候間、罷越度奉存候。右之趣被成御差図可被下候。以上。
- 六月十六日 松平大膳大夫
- (付札)
- 京都江立寄御機嫌被相伺候儀者可為勝手次第候。其外之儀者酒井若狭守相伺差図次第可被致候。《諸事伺之留》——東京大学史料編纂所蔵「大日本維新史料稿本」文久元年六月十六日条所収——、なお以下「稿本」と略す)
- (26) 「詳伝」九三頁。
- (27) 井上勲前掲論文四八頁。

(28) 参照、三谷博「文久幕制改革の政治過程」(年報近代日本研究3)「幕末維新の日本」所収、昭56、山川出版社一〇四—一〇五頁。

(29) 『詳伝』九五頁。

(30) 『詳伝』一〇二—一〇三頁。

(31) 当時、ともに外国局の吏僚であった福地源一郎と田辺太一は、明治になってから当時の幕閣の対応を回顧して、それぞれ次のように述べている。

長州の役人に長井雅楽と云へる者ありて、其藩主に建議して云く(中略)幕閣は此建議を見て、恰も死中に一活路を得たと思を成し(後略)
(福地源一郎『幕府衰亡論』一七九—一八〇頁)

長州侯の国是を一定せんとの上書あり。其藩主長井雅楽をして、公武の間に周旋して其事を計画せしめんとせしに会せり。將に溺れんとするものは、一茎の蘂をも便りとするものなり。幕府は直にこれに依頼して、其志す所を達せんとせり。(田辺太一『幕末外交談』一九八—一九九頁。なお、傍点はともに引用者)

このように、当時の幕府が、少なくとも対朝廷関係においては、第三者の援助がなくては改善が不可能であったとする見解は、両者とも全く一致しているのである。

(32) 参勤交代の例規からすれば、藩主は四月には江戸に着いていなくてはならないが、秋まで延期を願っていたのは、公武間周旋を行なうために長井に朝廷と幕府の意向を探らせていたためと思われる。

(33) 文久元年十月九日付、益田弾正より京都留守居乃美権右衛門宛書簡(『稿本』文久元年十月二十四日条)による。なお、長井はこの時すでに藩主より先に江戸へ向け出発している。長井がいれば、このような決定がなされたかどうかは疑問であろう。

(34) 『毛利家史料』(『稿本』文久元年十月二十四日条)。

(35) 『編年史』文久元年十二月八日条。

(36) 『詳伝』一一一—一二四頁。

なお、この「長州侯建白」は、長井の「航海遠略策」と比べて、いささか趣を異にしているが、それは長井の「航海遠略策」が、鎖国を主張する朝廷に対して開国論を説くことを主眼として書かれたものであるためであり、もとより開国を推進している幕府への建白とは、おのずと筆致が異なっているのは当然であろう。

(37) 長州藩で世子のうちに少將に任じられた前例としては、わずかに先代藩主の斉広の例があるだけで、しかもこれは斉広の正室が將軍徳川家斉の娘であったための特例であった。したがって、徳川將軍家との姻戚関係のない定広が少將に任じられたのは、まさに異例の昇進であり、ここから幕府が長州藩の周旋に期待をかけている様子が窺われる。

(38) (39) 『編年史』文久元年十二月八日条。

(40) 次節で述べるように、周布政之助はすでに反対派に寝返っているし、穴戸九郎兵衛も京、大坂にあって反対の立場を明確にしている。また、当役の益田弾正は十二月十二日付の藩地家老宛書簡の中で、「若も此御方(藩主)え御周旋之義被仰掛候儀も雖計、万一左様有之候ても不容易事柄」(『詳伝』一一五頁)と、幕府の周旋依頼に対して危惧の念を表明している。

(41) 『詳伝』一二六頁。

(42) 『詳伝』一二七—一二八頁。

(43) 『詳伝』一二八頁。

(44) 『詳伝』一二六頁。

(45) 長井の禄高は百五十石であったが、文久二年二月に従来の周旋の労を賞されて、長井家の旧高である三百石に増加された。(『詳伝』一二五—一二八頁)

(46) 『詳伝』一二四頁。

(47) ただし、この会見については、兼重讓蔵、井上小豊後が北条瀬兵衛

に宛てた文久二年二月二十六日付の次の書簡に、その概要が記されている。

〔前略〕過る二十三日公儀人を久世様ニ御呼出、御家来長井雅樂事明日四時御城可被差出之御達有之、翌朝御留守居同道罷出候処、御老中様御一同於御城柳之間御相對有之、御目付其他御掛ニ而御建白之御趣意逐一被聞召、一々御尤之筋と厚く御相摺有之候付、此往御処置御見込之処同三ヶ条差向有廉儀御内々相同候処、御同意之儀御即答有之、尤右之内有限一条ハ是以御同意之御様子には相見候得共、御大造之御事ニ付、得と御案思被成置度御願申上置罷帰候。誠に御趣意筋一層にも洞豁ニ相開け、是迄之処ハ無此上御都合ニ相成欣快之至奉恐悅候。

〔後略〕(山口県文書館所蔵『年度別書翰集』第十卷所収)

(48) 『編年史』文久二年三月五日条。

(49) ただし、藩地(支藩、支族を含む)との交渉は、まず直目付の内藤造酒が行なうように命ぜられ、また井上小豊後も長井を追って上京し、周旋に協力するように命ぜられている。

(50) (51) 『詳伝』一三四頁。

(52) 慶応三年十二月九日の小御所会議で、岩倉が大政奉還派の山内豊信(容堂)をやりこめて、会議を討幕派に有利に進行させたことはよく知られている。

(53) 『編年史』文久二年四月七日条。

(54) 堀次郎(小太郎、後の伊地知貞馨)は、島津久光の率兵上京のための、言わば先触れ兼偵察役として、久光より先に上京していた。この点は長州藩における長井の立場と似ているが、長井の場合は後統との距離が長く、とすれば長井の独走と見られがちであったのに対し、堀の場合は後統との距離が極めて短かったという点で大きく異なっている。

さて、長井も在京中に堀と何度か会見しているが、四月二日に長井が林主税に宛てた書簡には、次のように会見の様子が記されている。

薩州堀次郎来訪、種々談判仕候へとも差而異説も無之、状況ハ難計候得共、多分暴動ハ仕間敷、其段ハ武士之一言と申事に於て誓ひ候。従是ハ御勝手次第ニ可相成と申心底にて、言葉ハ穩ニ答置候。(山口県文書館所蔵『官武間周旋始末』第一篇第十章所収)

薩摩藩の西郷吉之助や大久保一蔵は、堀が長井と気脈を通じているのではないかと警戒していたが、このように実際には両者の間に提携への動きは見られず、「従是ハ御勝手次第」と、各々が道を行くことになるのである。こうした結果になったのは、公武間周旋の主導権をめぐっての両藩の強烈なライバル意識によるところが大きいと思われる。これは、七月の長州藩の藩論転換にも大きな影響を与えることになる。

(55) 『詳伝』一三五頁。

(56) 『編年史』文久二年四月七日条。

(57) 『詳伝』一四三頁。

(58) やがて、勅使大原重徳によって幕府に示された「三事策」の一つに、長州藩の意見である将軍上洛論が入れられたのも、その表われであろうところで、毛利敏彦氏は将軍上洛論第一項について、「第一項は長州藩および尊攘派の主張で、将軍を上洛させた上で攘夷実行の勅令を下し一氣に攘夷体制にもちこもうとするねらいをもつものであり、開国論の薩藩の所論とは相容れぬものであった」(毛利敏彦『明治維新政治史序説』一三七頁)と述べている。だが、長州藩の将軍上洛論は、前述の如く長井が文久二年三月四日に久世に建言した田安慶頼(将軍後見職)上洛論に端を発するものであり、その目的は公武合体の実をあげることにあった。したがって、結果的に翌文久三年に攘夷誓約の形で実現されることになったにせよ、長州藩の将軍上洛論は最初から攘夷を目的としたものではなかったのである。

(59) 妻木忠太著『久坂玄瑞遺文集』上巻(昭19、泰山房)、二四四〜二四六頁。

(60) 日野清三郎著、長正統編『幕末における対馬と英露』昭43、東京大
学出版会三八頁。

(61) 『久坂玄瑞遺文集』上、二八三頁。

(62) 文久元年六月十一日付、桂小五郎より周布政之助宛書簡(木戸孝允
文書)一、一三七―一三八頁。

(63) 文久元年八月五日付、周布政之助より兼重讓藏、小川市右衛門、山
田宇右衛門、中村九郎兵衛宛書簡(周布伝)上、六九八頁。

(64) 周布は、次のように和宮降嫁に対する憂慮の念を示している。

(和宮)御下向に付ては在下有志之面々種々議論有之趣に付、可然被仰
出之通、来月御下向候は、幕政は弥謫詐に走り、在下有志憤怒候
而、東禅寺夜襲体之事は相止間錯戟之様に相見申候。(文久元年八月
十七日付、周布より藩地宛書簡——『周布伝』上、七〇七頁)

(65) 周布は、江戸における物価の高騰に対する憂慮の念を次のように述
べている。

貨幣日に増下落、近近新銭を鑄候由、二十五兩之大判も市中和市に而
は三十二兩位に取引仕、物価は日々騰貴、夷に世運は一変、此往如何
成行可申哉、無覺束時節に御座候。(註63と同じ書簡——『周布伝』
上、六九四頁)

(66) 両者の間に論争があったことを伝えているのは『浦靱負日記』の次
の条項のみである。

周布政之助、長井雅楽と論争いたし、御役御断申出、尾道より秋え罷
堀候由、穴戸九郎兵衛へ浪華頭人罷登候途中に而出会、茶店に而都合
之趣承り候段、一昨日船中風相に付、室津繁船に付、飛脚を以秋良敦
之助へ参り相對に而、右等之話承候よし、昨日昼時分敢之助罷歸り、
右話仕候。是等近來之一珍事に而御座候事。(山口県文書館所蔵『浦
靱負日記』、文久元年十月二十一日条)

当時、浦は兵庫警衛の任にあたっており、右のような経路で、この報

に接した。わずか七ヶ月前には、ともに「航海遠略策」の藩論化に力を
尽し、以後も一致協力して公武間周旋を推進してゆくことを期待されて
いた二人が、突如として袂を分かったことは、家老としての豊富な経験
を持つ六十四歳の浦の眼にさえも「近來之一珍事」と映ったのである。

(67) 文久二年正月二十日、周布は逼塞に処せられたが、まもなく藩主よ
り再び江戸に来るよう求められ、三月十日に逼塞が解かれると、直ちに
周布は江戸へ赴いた。自らが藩論として起草した「航海遠略策」に対し
て反旗を翻すという無責任極まりない行動に対する処分としては、あま
りにも軽すぎると思われるが、別の見方をすれば、これは周布の力量が
藩政府内で非常に重んじられていたことの証左とも言えよう。

(68) 福本義亮編『久坂玄瑞全集』(昭53、マツノ書店)四六七―四六八頁。
なお、この「長井雅楽罪案」は、次註の建白書の原案となったもので、

長井の「罪」五ヶ条が列挙されている。

(69) 『久坂玄瑞全集』五〇七―五〇八頁。ところで、江戸でこの建白書
を受け取った藩主は、「於内輪ケ様之儀有之候様ニては、建白一糸手障
りにも相成、不束之至りニ候間、早々京都へ申遣し、彼者共え嚴罰申仕
候様ニ」(『詳伝』二五一頁)と激怒したという。このように、久坂らの
建白は藩主の容れるところではなく、むしろ藩主は彼らを嚴罰に処する
ように命じたのである。だが、この命令は「謗詞一件」の発生による混
乱に紛れて遂行されなかった。

(70) 『久坂玄瑞全集』五〇八頁。

(71) 明治になって、長井に対する贈位問題が起こると、山県有朋が強硬
に反対して、長井への贈位は認められなかった。もっとも、井上馨は長
井を評価して、「元徳(定広)に説いて長井の遺族扶助をなさしめた」(『世
外井上公伝』第一巻、四〇頁)り、中原邦平に「長井雅楽詳伝」を編纂
させたほどであったが、もとより山県の意見には抗すべくもなかったの
である。